（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報告書

プログラム名	ユニバーサル・アクセスによる 双方向小学校英語活動研修プログラム開発
プログラムの特徴	小学校外国語教育（英語教育）を創るプロセスにおいて重要なキーワードは、「共有すること」と「相互交渉」である。そのために、本研修カリキュラムは、同じ興味や関心を持つ教員間のつながり及び専門家と教員とのつながりを重視し、インターネット上のコミュニティサイト内に研修講座を構築し、指導力の向上や課題の解決を図り、もって、小学校教員の資質能力の向上に貢献しようとする試みである。 また本研修プログラムは、ネット上のコミュニティサイトを活用して、まずオンラインの研修により、時と時間に縛られない研修コンテンツへのアクセスを可能にした。最新情報や研修機会が不足しがちな遠隔地で教える教師、日常業務に忙殺される教師にとって、こうしたネット上の研修講座は大きなメリットをとなる。 さらに、本研修プログラムのユニークな点は、そのオンラインの研修コンテンツを元に、対面のオフラインでの研修を組み合わせたことである。これにより、オンラインのコンテンツにもとづいて、講座内容について講師と直接質問や意見交換をすることができ、より深い理解を図ることができ、ネットの講座コンテンツだけでは伝わりにくいものも理解することができる。

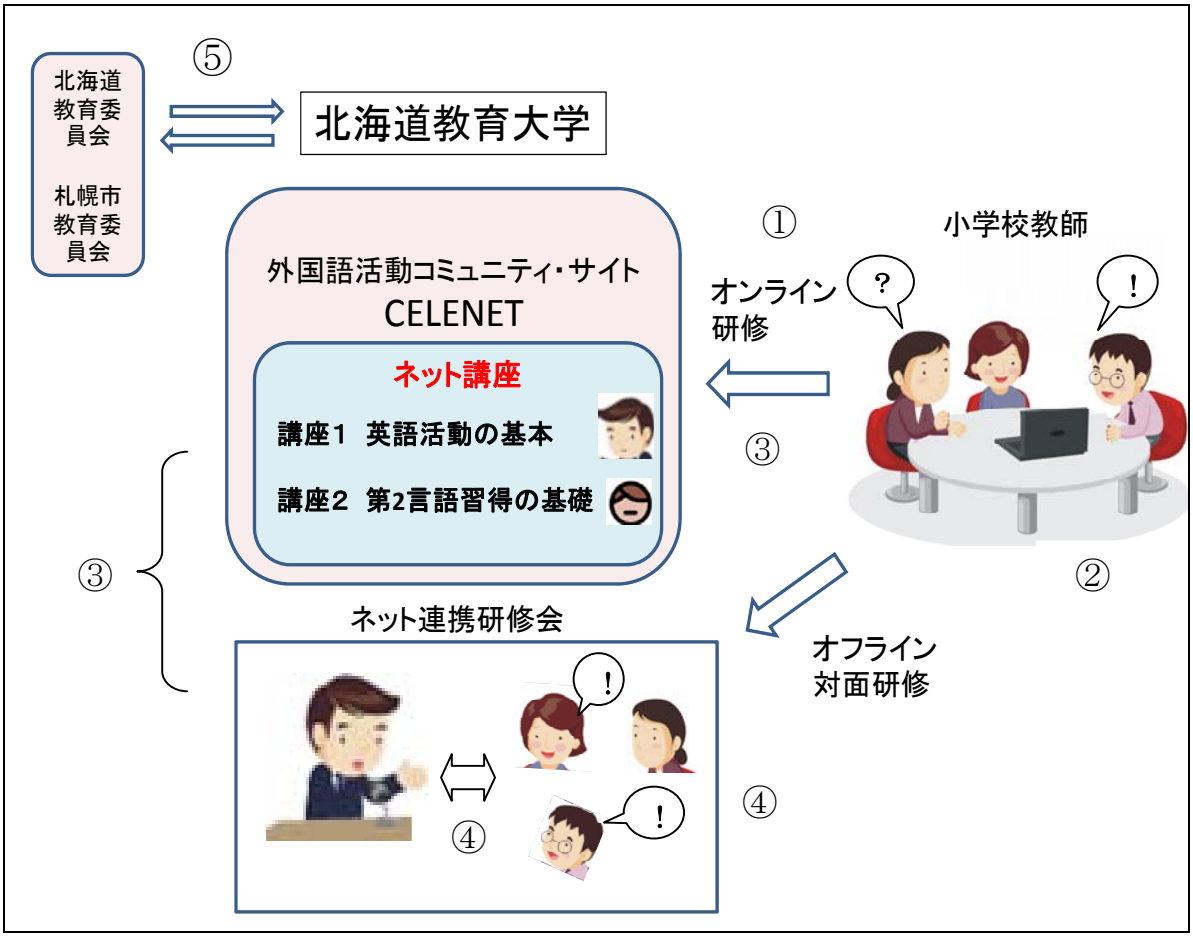
平成２２年３月

機関名	連絡先	
北海道教育大学札幌校	教授　佐藤吉文	satoy@sap.hokkyodai.ac.jp 011-778-0389
	教授　萬谷隆一	yorozuya@sap.hokkyodai.ac.jp 011-778-0352

プログラムの全体概要

本研修プログラムは、ネット（オンライン）と対面（オフライン）を組み合わせた研修構造を構築し、以下の成果があった（図１）。図中の番号は、下に示した各成果に呼応している。

図１



●成果

① <u>成果１　時と場所にしばられないアクセス</u>

遠隔地の教師でも容易にアクセスできる。また時間に縛られず、研修会に行かなくとも自由な時間に学ぶことができるネット上の研修講座を構築した。

② <u>成果２　最新情報と理論的知識の提供</u>

指導方法や教材についての最新の知識のみならず、実践を支える理論や学問的な背景知識を提供する仕組みを構築することができた。

③ <u>成果３　教師の学びと気づき</u>

専門的知識が不足する小学校教師が、本教員研修プログラムで多くを学ぶことができた。

④ <u>成果４　オンライン・オフラインでのインタラクション</u>

ネット講座の質疑応答機能と対面研修により、参加者と講師のやりとりを可能にした

⑤ <u>成果５　教育委員会との連携</u>

地域の教育委員会との連携により、研修機会の提供、広報など協力関係を築いた。

Ⅰ 開発の目的・方法・組織

１．開発目的

小学校段階における外国語活動（英語活動）は、高度に情報化され、国際化した現代社会の中で、人との交わりに必要な共生のための基本的態度及び国際感覚のあるコミュニケーション能力をもった人材の育成のために重要である。

本学では、文部科学省からの委託事業である「小学校英語活動地域サポート事業」（平成１７年度・１８年度）の後も、北海道立教育研究所等の機関と連携を図りながら、北海道内の小学校英語活動における教員の指導力向上や指導内容の充実を図る研修会等の取組を鋭意行ってきた。

平成２３年度から、小学校５・６年生の外国語活動（英語活動）が必修化した現在、多くの教員が、外国語活動（英語活動）で様々な取組を始めようとしているが、小学校教育という未知の新しい土壌の中で、指導する教員には、「指導力」と「英語運用能力」の向上が求められている。

とりわけ北海道は他地域に比して、「広域性」という大きな課題を抱えている。札幌から釧路、稚内等の移動に 4～5 時間以上もかかる土地柄から、地方の教員は、小学校英語にかかわる指導力・英語力の不安を抱えながら、研修機会の絶対的な不足に悩んでおり、時間と場所に制限されない研修機会への社会的ニーズはきわめて高まっている。

そこで、本プロジェクトの目的は、ネット上の講座による知識情報提供と対面による研修講座を組み合わせ、きわめて不足する小学校外国語活動にかかわる研修機会をユニバーサルに提供することで、小学校教師の外国語活動指導力の形成を図ることである。

２．開発の方法

１）多忙化する学校現場に身を置く教員に、「時間」と「場所」に縛られることなく、インターネットの活用により研修の機会を提供する。

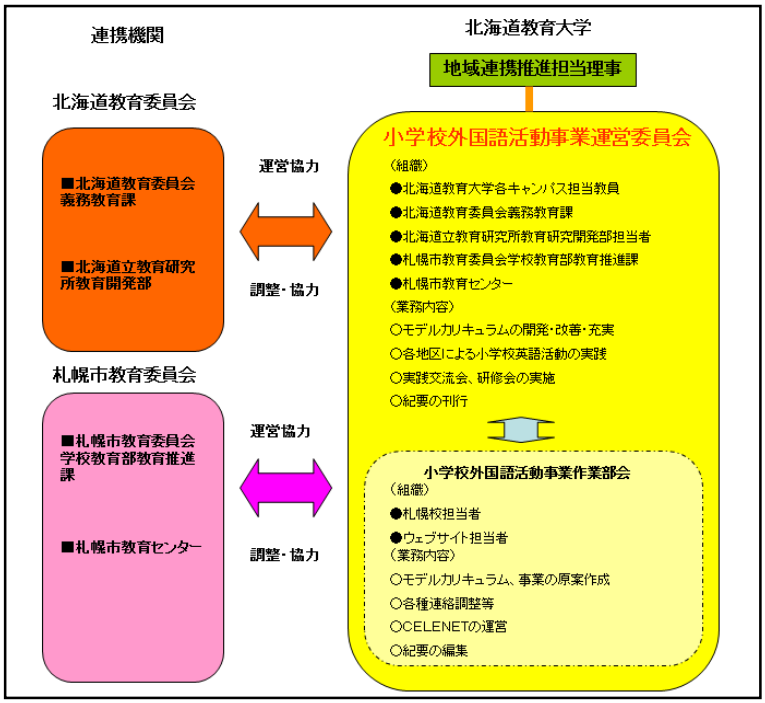
２）インターネット上のコミュニティサイトを基盤とすることで、地域格差のない研修機会の提供を図る。

３）コミュニティサイトに「小学校英語教材論」「小学校英語指導方法論」「カリキュラム論」「英語習得に関する科学的知見」といった教員養成大学の専門的知識を結集し、実践的ニーズに応じた研修コンテンツを用意し、教員の資質能力の向上を図る。

４）コミュニティサイトの利用者相互のコミュニケーションを可能とすることで、情報交換を促進させ、講座内容についての意見交換や事例の紹介など参加者自身の参加による内容の拡がりや発展を目指す。同時に教員間の人的ネットワークを広げ、講座内容に基づく実践を支える地域のつながりを形成する。

３．開発組織

図2



小学校外国語活動事業運営委員会の構成（図２）

① 小学校外国語活動運営委員会は、本学教員、北海道教育委員会義務教育課北海道立教育研究所教育開発部、札幌市教育委員会学校教育部教育推進課、札幌市教育センターで組織する。

② 機能的な運営を行うため、小学校外国語活動事業運営委員会の中に、小学校外英語活動作業部会を設置し、連携機関との連絡調整、ウェブサイトの更新、教員研修モデルカリキュラム及び各種研修会の原案作成を行う。

Ⅱ 開発の実際とその成果

以下、本事業において実施した講座について、３種類（ネット講座、ネット連携対面講座、ネット連携実践交流会）に分けて、その概要と成果について報告する。

１．<u>ネット講座</u>

〇研修の背景やねらい（※ねらいについては、明確に記述）

ネット上（小学校外国語活動コミュニティ・CELENET）に、本学および小学校外国語活動の専門家による講座を開設し、どこからでもアクセスできる研修機会を提供し、最新の情報、理論・背景知識を提供する。

〇対象、人数、期間、会場、日程、講師

対象：小学校教師、中学校教師、研究者などCELENET登録者（695名）
開発・試行：　7月～10月
講座公開：11月16日ネット開講
講座アドレス：　http://celenet.info/
講師：

●北海道教育大学教員

佐藤吉文、　ミッシェル･ラフェイ、横山吉樹、加藤富夫、本堂知彦、
皆川治恵、水野政勝、大賀京子、　萬谷隆一、　上山恭男、石塚博規

●特別講師

卯城祐司(筑波大学)
安田昌則(福岡県大牟田市立明治小学校)
梅本龍多(大阪府河内長野市立高向小学校)

〇各研修項目の配置の考え方

昨今の小学校外国語活動の研修講座は、主に指導技術・テクニックに偏る傾向がある。本講座では、明日役に立つ研修内容も重視しつつも、むしろ外国語活動の実践を支える基本的理論背景、学問分野などからの知見を提供し、より広い視野から実践を見ることができる講座内容とした。具体的には、以下の内容をバランス良く含むよう講座を編成した。

１）英語そのものの背景知識・文化知識を知る講座　（水野　本堂　大賀）
２）英語の力を高めるための講座　（皆川　加藤）
３）英語の習得にかかわる知見　（横山　石塚）
４）外国語活動にかかわる基本的考え方　（上山　卯城）
５）外国語活動の指導法・教材の基本的な考え方（佐藤　萬谷 安田　梅本）

〇各研修項目の内容　（実施形態：ネット講座）

佐藤吉文教授「小学校外国語活動のためのカリキュラム」
ミッシェル･ラフェイ（外国人教師）「外国語活動を楽しくする４つのヒント」
横山吉樹教授　「早期英語教育に関わる誤解」
加藤富夫教授「発音とつづりの関係を考える」
本堂知彦教授「君もジェダイの騎士だ？！－現在に生きる歴史的言い回しについて」
皆川治恵准教授「英語の絵本を楽しむための発音練習」
水野政勝教授「複数形のふしぎ」
大賀京子准教授「英文法を楽しもう」
萬谷隆一教授「コミュニケーション活動の基本的考え方」
上山恭男教授「小学校外国語活動の新たなる可能性―ことばへの気づきを求めて―」
石塚博規教授「小学校の語彙と ICT」

●特別講師
卯城祐司(筑波大学)「外国語活動をダメにする３つの方法」
安田昌則(福岡県大牟田市立明治小)

「学級担任を中心とした小学校外国語活動の推進」

梅本龍多（大阪府河内長野市立高向小）「小学校外国語活動（英語活動）の最初の一歩」

使用教材、進め方

ネット講座の使用教材は、各講師に講座テキストを執筆してもらい、
ネット上にアップロードした。本学教員11名、外部特別講師3名による
講座が開設されている。

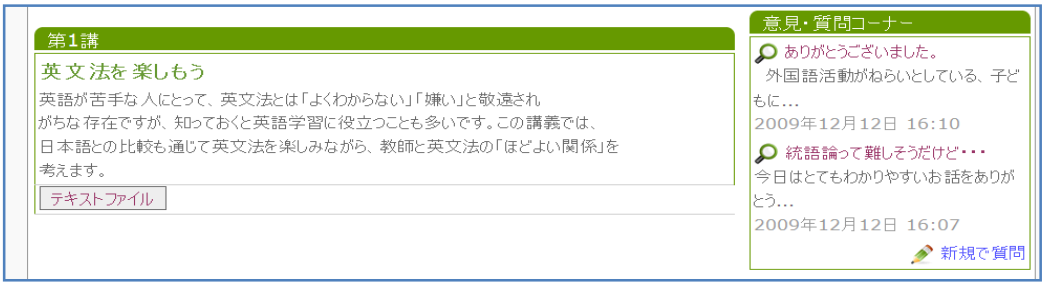
図３

各講座をクリックすると、概要とテキストが表示され、自由に受講することができる。

図４

さらに、各講座には、当該講座についての「質問コーナー」機能が用意されており（図５）、受講者は自由に講師、あるいは受講者とやりとりをすることが可能な仕組みになっている。

図５



〇研修の評価方法、評価結果

本講座のアクセスは、11月16日の講座公開より3月31日現在までの実績は、以下のような結果となった。

A のべアクセス人数
680 名
B 受講実人数
156 名
C 総合受講時間
1398 時間
D. 1アクセス平均受講時間
2.44 時間

のべ人数（A）は680名であり、実人数はBの156名である。これは、一人平均4.36回のアクセスとなる。156名のユーザーが、一人平均4回以上ネット講座を読みに行ったということは、かなりの購読量があったということになる。

受講時間（C,D）は、正確に各ユーザーの受講時間を算出するのは困難であるため参考程度の結果である。明らかにオンラインのまま受講していないと判断されるケース（接続時間12時間以上）を除外した数字である。アクセス者の購読時間が合計で1398時間であり、平均２．４４時間購読していたという結果が出ている。

アクセス・ユーザーには、のべ人数で、教員404名、学生277名という内訳になっている。教育委員会関係者は、そのうち42名である。

本講座の成果を以上の数字から判断すると、受講したユーザー数もかなりにのぼり、それぞれのニーズに従って、ネット講座に提供した論考を読んでいることから、大学として提供できる理論的背景、考え方などについて、多くの実践者が情報を得ていたことが読み取れる。

※実施要項、テキスト等の資料を添付するので、そちらを参照されたい）

〇実施上の留意事項

本事業によるネット講座は、北海道教育大学が総務省SCOPE予算によって基本部分を構築した小学校外国語活動コミュニティCELENETを発展的に拡張してきたものである。他の県の教育委員会、地域の研究会、学校が自由に登録できるシステムとなっており、そのような団体・組織がCELENETをそのまま活用して研修に役立てることが可能である。

〇研修実施上の課題

今後、ネット講座の内容について、現場のニーズを勘案して、現状のままでよいかどうかについて、さらなる検証が必要である。

２．ネット連携対面講座

（平成21年12月18日　北海道教育大学札幌校）

上記ネット講座は、インターネット上で自由にアクセスできる研修機会を提供するものであるが、対面ではないため、講師が意図するところをニュアンスや主張の強さ弱さまで含めて、十分に意図を理解することは、必ずしも十分ではない。そのためネット講座の内容に基づいて対面でネット講座講師による研修会を開催した。

講習風景

〇研修の評価方法、評価結果

評価：52人参加者中の教員19名についてのアンケート調査を行った。「本講座のお役立ち度」（5点満点）の評価は以下の通りである。

参加者平均→	3.80
5 点	3
4 点	6
3 点	7
2 点	0
1 点	0

以上のように全体としては、一定程度、好意的な評価があったと判断している。
また質的な評価としてアンケート記述も取っており、そこにも好意的な評価が多く見られた。

参加者の声（プラス評価）

●私たちの実践はしっかりとした理論の上に成り立つものであると考えます。したがって大学の先生から理論を学ぶことはとても大切なことだと思います。
●早期教育という観点から小学校英語の到達目標や期待される学習効率をとらえると間違うというお話でしたが、学習指導要領には明記されてはいるものの広く流布している誤った考えをご指導いただけたのは有益でした。
●小学校英語の目指す方向性がはっきりとわかりやすく示され大変勉強になりました。ありがとうございました。
●あらためて f,v などの発音を意識できてよかった。
●いろいろな種類の関心に訴える内容構成になっている点は参加を決めるうえでとても役立ちました。事前に CELENET にレジュメや詳細な講演資料をアップロードしてくださっていた点も参加者にはたいへん役に立つと思いました。

ただし、以下のような改善についての要望もあり、今後の内容改善に生かしたい。

参加者の声（マイナス評価・要望）

●時間が短かったと思います。事例的なことをもう少し入れてほしかった。
●講座の中にアクティビティがあるとよい。
●英語はどうも苦手でできれば避けたい!と思っている先生方を集めたセミナーも開催してあげてください。
●このような研究会が函館でも必要だと思いますのでぜひ企画してください。

３．<u>ネット連携実践交流会</u>

（平成22年2月13日、14日　札幌かでる２．７）

この実践交流会は、毎年北海道教育大学が開催しているものであるが、上記２のネット連携の講座を追加して開設した。その内容は以下の通りである。

●ネット連携講座
上山恭男教授「小学校外国語活動の新たなる可能性―ことばへの気づきを求めて―」
石塚博規教授「小学校の語彙と ICT」
●ネット連携特別講座
卯城祐司（筑波大学）「外国語活動をダメにする３つの方法」
安田昌則（福岡県大牟田市立明治小学校）

「学級担任を中心とした小学校外国語活動の推進」
なお、卯城教授、安田氏による講義は、ネット講座上でも学外講師による特別講座として概要を掲載している。交流会参加者は全体で約200名、グループディスカッションは107名であった。

この交流会におけるもう一つ特長は、参加者全員で行ったグループディスカッションで討議した内容をネット上に掲載し、意見交換もネット上で可能にした点である（図。これは、交流会当日、話し足りなかった部分をネット上で継続討議する場を設け、かつ当日の交流会に参加できなかった人たちに当日の議論の内容を知ってもらう試みであった。この仕組みは、各県で一般に行っている研修でも応用が可能である。その時限りの意見交換ではなく、議事録的にネットに履歴を残し、かつそれを元にネット上でも続けて議論することが可能である。

北海道教育大学小学校外国語活動
実践交流会のグループディスカッションの様子

平成22年2月14日（日）
札幌　かでる２．７

図６　CELENET上の意見交換コーナーを利用した、
研修会分科会のリポートとネット上での意見交換

小学校英語コミュニティ CELENET

教材集 みんなで教材を共有しよう | Q&A 質問・疑問はこちらへ | 連絡ボード お知らせはこちらへ | 意見交換 議論はこちらで | 新着日記 みんなの日記を読んでみよう | メンバー 知人を探そう | 所属校 みんなの所属はこちらで | HUEネット講座 小学校外国語活動研修講座

トップ | 日記 | メール | カレンダー | ファイル倉庫 | 足あと | プロフィール | お気に入り | ヘルプ | ログアウト

意見交換

●小中連携（実践交流会連携フォーラム）
北海道教育大学　小学校外国語活動実践交流会の
グループディスカッション（H22.2.14 札幌市）と連携した
ネットフォーラムです。

当日参加できなかった方、および当日話し足りなかった方のための、
グループディスカッションの討議内容の紹介と意見交換を
目的としています。

返信を書く | 作成者：萬谷隆一　| 作成日：2010年2月3日 11:42 | 編集 | 削除

回答

Re: ●小中連携（実践交流会連携フォーラム）
北海道工業大学　　です。小中連携グループに参加させていただきました。

小中連携に集まったメンバーは小学校の先生3名（うち1名は中学校経験者）の他に小中一貫校の先生、中学校教員、高校教員、大学教員、そして大学生の皆さんと大変バラエティーに富んでいました。そのため小中の連携に限らず、小中高大、幼小の連携などにも関心がある方もいらしたようです。
はじめに連携の実態を交流しました。中1ギャップ解消のために校区内で組織的に取り組んでいる学校や特区として連携に取り組んでいる地域がある一方で、必要は感じているものの未だ具体的な取組みがないところもあることがわかりました。連携の実態は様々であり、温度差があるということが明らかになりました。
そうした各自の置かれている状況を交流していく中でいくつかの問題点が出されました。

（1）「小学校の先生が頑張れば頑張るほど中学校との壁が高くなってしまう」
つまり、小学校での楽しい体験活動を中学校で生かし切れていないという問題点です。Communication活動をしてきていることを前提に中学校の指導が変わることが求められているのに、中学校の教師にそうした意識の変化がないのではないかという点で話が盛り上がりました。小中の連携では中学校側にこそ変革が求められているという印象をもちました。

そうした小中でのギャップを埋めるための対策として以下のような点が出されました。
①教育の連続性、内容や指導の系統性をもって指導すること
②小学校と中学校での英語は異なっているのだということを子供に納得させること
③中学校では小学校と同じ活動をするのではなくversionアップさせること
④子どもの楽しいという思いを中学校側でうまく引き継ぐこと

〇研修の評価方法、評価結果

この実践交流会に対する評価は、以下の通りであり、参加者の評価は、おおむね好意的であった。

実践交流会への評価 「この研修会は、ためになりましたか？」					
とても〇	ためになった	どちらでも	あまり×	ほとんど×	その他
16	33	2	1	0	0

また、ネット連携の講座については以下のような感想があり、一定の評価があった。

「理論から実践まで幅広い内容を効果的に紹介されており、大変よかったと思います。」

「小学校外国語活動を実践していく上でとても参考になりました。「遊びのプロ」としての小学校教員として、子どもたちのコミュニケーション力をどのように育てていけばよいのかのヒントがたくさんあった。」

「市町村や地域による違い、道外の様子、ICTの活用等、様々なことを学ぶことができ、とてもよかった。」

なお、この交流会で行ったアンケート調査によれば、以下のような研修希望があることが分かった。今後のネット・対面の研修講座の内容に反映すべきと考えている。

今後取り上げて欲しいトピック	
1. 教材の紹介	15
2. 指導方法の紹介	25
3. 英語ノートの使い方	12
4. カリキュラムの立て方	14
5. 英語ノートの使い方	10
6. 高学年の指導	9
7. 教育機器の紹介と利用方法	9
8. 理論的背景についての解説	7
9. 英語力アップ講座	6
10. 発音訓練	4
11. 小中連携	14
12. 評価	8
13. ワークショップをもっと	6
14. ディスカッションの場をもっと	6
15. 色々な地域の先生と情報交換	11
16. 講演講師ともっと話がしたい	5
17. 実践校の事例発表をもっと	17
18. その他	2

Ⅲ 連携による研修についての考察
（連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等）

地域の教育委員会との連携については、本事業申請時より内容・企画について担当者と十分に協議し、それぞれのニーズと役割分担を確認しつつ進めてきた。北海道教育委員会および札幌市教育委員会については、H17・18 年度文部科学省小学校英語活動サポート事業、および平成 19・20 年度総務省戦略的情報通信研究開発推進制度 SCOPE による受託研究において、密接に連携しつつ小学校教員のための研修手段・機会の提供を継続的に行ってきた経緯があり、信頼関係が醸成されてきている。
こうした経緯と組織間の良好な関係を発展させるためには、以下の点が重要になってくる。

こうした地域の連携関係により、北海道という広域にわたる地域のデメリットを克服し、多くの教員に研修の機会を提供でき、総体的に教員の資質能力を向上させることができる。また、教員養成系大学として、学生にもプラスの教育効果があり、若手教育実践家の育成に資するところが大きく、ひいては地域の教育のレベル向上に貢献することができる。

課題としては、上記の評価結果から分かるように、理論・学問的知見の提供といった大学にしかできない側面の研修支援は今後も充実させてゆく必要があるが、教育現場の課題・ニーズへの関連性や有用性をどのように担保してゆくかという点が重要である。この点については、教育関係者との人的なつながりと情報交換を密接に行い、大学側が学校が直面している課題を常に把握し、関連性のある知識情報を常に探し用意する粘り強い努力が必要であると考えている。

Ⅳ その他

［キーワード］小学校外国語活動、英語活動、英語教育
［人数規模］　D（ネット講座受講者１５６名（のべ680名）、ネット連携講座　20名、実践交流会約２００名、合計３７６名）
［研修日数(回数)］対面研修　B　ネット講座　D（対面研修3日間、ネット講座開設5ヶ月間 ）

Ⅴ おわりに

本事業は北海道教育大学が地域の教育委員会と連携して、一年間にわたって、対面研修とネットを活用して、時と時間に縛られない研修機会を提供する試みを行った。オンラインとオフラインを併用したこの教員研修モデルは、小学校外国語活動にかかわる知識情報をいつでも、どこからでも知ることができ、また同じ課題を抱える教師と、地域を越えて意見交換し、指導法・教材を共有することができるという点で、全国的にも特色ある取り組みであり、これからも多くの可能性を有している。

北海道教育大学の小学校外国語活動コミュニティ・サイトCELENETにはすでに700名近くの登録者がいるが、北海道という地域の枠を越えて、全国の他地域からの登録者も増えてきており、多様なニーズを持つ教師が集う場となりつつある。この度のモデルカリキュラム事業により、このCELENET のネット講座機能付加と連携した対面研修が実現でき、その成果により今年度はさらに豊かな広がりのある研修内容と機会を提供できたと考えている。

おわりに、このような機会を与えて下さった教員研修センターの関係者に感謝の意を表したい。

【問い合わせ先】

国立大学法人北海道教育大学
〒002-8502　北海道札幌市北区あいの里5条3丁目
担当：総務課　TEL 011-778-0210
koho1@sap.hokkyodai.ac.jp